文芸読本

# 夏目漱石

文芸読本

# 夏目漱石

河出書房新社

文芸読本　夏目漱石　©1975

初版発行　昭和五十年六月二十五日
十五版発行　昭和五十三年五月十五日

定価　六八〇円
0091-037526-0961
落丁本乱丁本はお取りかえいたします

発行者　佐藤晧三
発行所　株式会社　河出書房新社
〒162　東京都新宿区住吉町九五
電話　(三五五)五三一一
振替　東京一〇八〇二

印刷　多田印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

夏目漱石アルバム


夏目漱石小伝　江藤　淳　10

漱石の青春　中村光夫　32

自己本位の立場　吉田六郎　45

恋愛の倫理　平田次三郎　86

則天去私をめぐって　平野　謙　96

漱石における「狂」の問題　唐木順三　172

漱石文学の物質的基礎　荒　正人　152

私の見た漱石　ヴィリエルモ　105

漱石と英文学　福原麟太郎　168

父の病気　夏目純一　189

『私の個人主義』　小宮豊隆　206

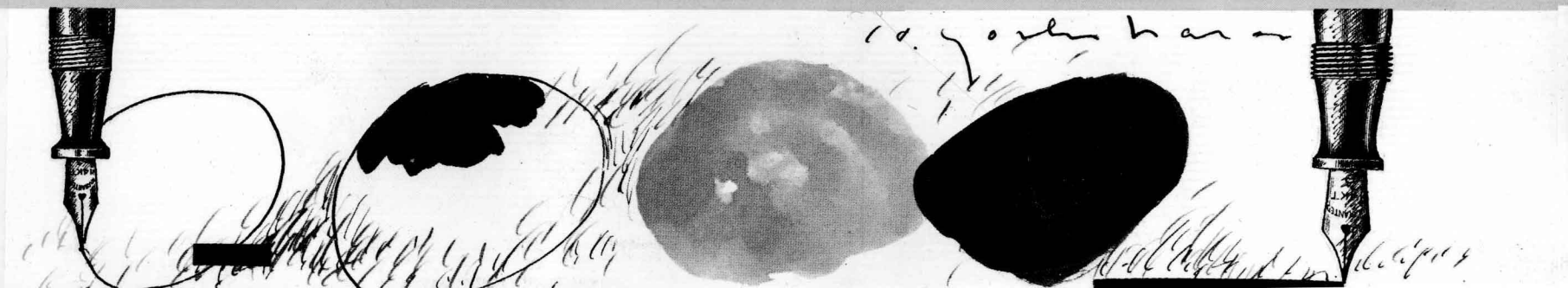
夏目漱石先生の追憶　寺田寅彦　208

漱石蓄音器・漱石遺毛　内田百間　209

漱石山房夜話より　江口渙　212

俳人としての漱石　林原耕三　215

葬儀記　芥川龍之介　217

座談会
わが漱石像　江藤淳　越智治雄　三好行雄　127

日本の思想家・漱石　猪野謙二　58
夏目漱石における近代　高橋和巳　51
淋しい「明治の精神」　桶谷秀昭　68
内側から見た生　柄谷行人　192

神経衰弱と女性　武田泰淳　114
漱石三部作について　福永武彦　124
女の空おそろしさ　小島信夫　116
「火鉢」　庄野潤三　118
「文鳥」「夢十夜」と「坑夫」　大庭みな子　120

夏目漱石作品
草枕　220
夢十夜　288
文鳥　301
漢詩　31
英詩　67
俳句　55
書簡　43 49 85 95 113 191
片々　187 203 205 285 287

夏目漱石年譜　井上百合子　309
参考文献目録・解題　井上百合子　317

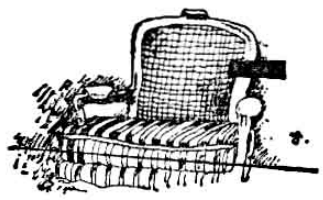

表紙絵＝晩年の漱石・津田青楓／目次裏＝ロンドン塔
目次・本文カット＝吉原英雄／扉・本文カット＝井上長三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 夏目漱石小伝

江藤　淳



## 1

《或日彼は誰も宅にゐない時を見計つて、不細工な布袋竹の先へ一枚糸を着けて、餌と共に池の中に投げ込んだら、すぐ糸を引く気味の悪いものに脅かされた。彼は水の底に引つ張り込まなければ已まない其強い力が二の腕迄伝つた時、彼は恐ろしくなつて、すぐ竿を放り出した。さうして翌日静かに水面に浮いてゐる一尺余りの緋鯉を見出した。彼は独り怖がつた。……》（「道草」三十八）

夏目漱石のことを考えると、私のなかにはさまざまな漱石像が浮かびあがって来る。十年前に「夏目漱石」を書いていたときには、それはいつも実際の年齢より老けて見える漱石の肖像写真の陰鬱な表情であった。プリンストンで講義の準備のために久しぶりで「こゝろ」を読みかえしたとき、私はある名状しがたい感動にとりつかれて知らぬ間に涙を流していたが、そのときには漱石は「像」というよりは透明な旋律のようなものになって、図書館の三階にあった私の小さな研究室を充たしていた。

そのほかにも私はいくつかの漱石像を想うことがある。たとえば「思ひ出す事など」の、「空が空の底に沈み切つたやうに澄んだ」のを眺めながら、陽光のなかに「しんとして独り温もつ」ている漱石。あるいは、酔って訪ねて来て玄関の上框に倒れかかり、「いよう夏目君！　天下語るに足るものは乃公と余あるのみ」というようなことをいってくだを巻いている小栗風葉を、「人間の声とも思はれないやうな、惻しい声」で、「馬鹿ッ！」と怒鳴りつけて怒りにふるえている漱石。……しかしそれらの像は、結局私の脳裏で、冒頭に引用した「道草」の一節に描かれたおびえた少年の姿の背後に消えて行くのである。

作家夏目漱石はいうまでもなくこの少年を超えた存在である。彼はその背後に「吾輩は猫である」から「明暗」にいたる幾多の名作を残している。彼が明治のみならず、近

代日本の文学全体を代表する巨人であることについても、諸評家の意見が一致している。しかし、それにもかかわらず漱石は、終生その心の底に、ひとりの「生」を怖れ、自分が存在していることに脅える敏感な少年を住まわせていた。彼の前にある池は、いわば彼の感受性がとらえた「生」の象徴である。彼がそのなかに糸を投じると、「生」は恐しい力で彼をその根源の暗い部分にひきずりこもうとする。そして糸をはなしたとき、それは静かな水面を泳ぐ一尾の緋鯉の姿に変容する。漱石は、すでにその少年時代にこういう「生」に出逢っていた。「道草」の少年と作家漱石との違いは、漱石が、このおびえた少年を心のもっとも柔い部分に住まわせたまま、あえて「生」というこの暗く濁った池の中に身を投じたというところにある。

漱石はおびただしい知力と強靭な意志にめぐまれていた。そのことは、僅か十一年間の作家的生涯になしとげられた仕事の、異常な密度と質の高さとを一見すれば明らかである。しかし、だからといって漱石は、知性や意志の力で自分と嫌悪すべき「生」とのあいだをへだてようとはしなかった。彼は「生」におびえ、自分の存在を怖れてはいたが、一度もそれを拒否しようとはしなかった。漱石の偉大さは、自分の存在のあらゆる襞のすみずみに、嫌悪すべき「生」の原形質をあえて滲透させてはばからなかったところにあるといってもよい。彼と併び称される森鷗外には、こういう「生」の受容はなかった。漱石の作品のなかには、鷗外の作品にはたえて感じられない優しさのみなぎっている個所がある。たとえば「門」の前半の、宗助とお米のひっそりした家庭生活を叙するくだり。あるいは「道草」で赤ん坊をあやす細君に注がれる作者の視線。これはかならずしも「生」の直線的な肯定ではない。漱石ほどいわゆる人道主義者から遠い存在はいない。しかし彼の暗い世界のなかには、私たちをそのままに許容する日だまりのような場所があり、そこに足をふみ入れた瞬間に私たちは漱石の心の柔い部分が自分の内部を開かせるのを感じる。つまり、漱石はたしかに恐しく孤独な人間であったが、彼の作品世界はかならずしも人を孤独にはしないのである。

漱石と、彼が五十年のあいだつきあわねばならなかった重い「生」との関係は、すでにその幼年時代から決められていたかも知れない。しかし、そういう彼の「生」は、さらに時代によって決定されていた。いいかえれば、漱石は彼が生れて来た「時代」に出逢うことなしには、彼自身の「生」に直面することができなかった。「道草」の、あの池に釣糸を垂れる少年を描いたときには、漱石はすでに四十九歳であり、いわば「時代」を通りすぎてしまっていた。だから彼は「生」の暗い力とじかにむかいあっている自分の姿を明晰に見てとることができたのである。私はここで決定論を弄ぶつもりはない。漱石は自分と「生」との関係を透視していたからこそ、その桎梏からの解放を書くことに求めたのであり、さらに自分の「生」が「時代」に決定

されていることを熟知していたからこそ、「時代」を超える作品を残し得たのである。だが、それなら漱石がそこで自分の「生」に出逢った明治という時代はどのような時代であったか。何故この「時代」が、漱石という個性に触れたとき、彼の「生」との交渉を忘れることのできない人間劇にたかめたか。

吉川幸次郎氏は、そのエッセイ「古典について、あるいは明治について」で、明治文化の特質を一種の肌理のあらさに求めている。要するに氏は、明治時代をひとつの完成された肌理こまやかな文化的秩序が解体して、もうひとつのそれ自体としての魅力がないわけでもない若く粗笨な文化の建設された時代と見るのである。これをもっと限定していうなら、江戸時代の儒学的文化秩序の上にスペンサー流の社会進化論が重ねあわせられ、後者が前者の枠組に浸透してこれを崩壊させて行く過程として見ることもできるであろう。「国のために」とか、日本文化を中核とする「東西文明の融合」というような明治時代特有の理想は、この二つの思潮、つまり儒学と社会進化論との平衡の上に夢見られた理想である。漱石はこういう二つの思潮を呼吸しながら成長した。正確にいえば、この二つの思潮の交替を呼吸しながらそのいずれからもこぼれ落ちたとき、漱石はひとりの作家として誕生したのである。しかし、それまでのあいだに、彼がどのようにして時代に、そして彼自身の「生」に出逢ったかを私は見なければならない。

## 2

のちに漱石という雅号で世に知られるようになった夏目金之助が生れたのは、慶応三年（一八六七）二月九日（旧暦一月五日）のことである。父夏目小兵衛直克は江戸牛込馬場下の名主で当時五十歳、その後妻だった母の千枝が四十一歳のときの子で、五男三女の末っ子であった。この実家のあった場所は現在の新宿区喜久井町一番地で、夏目坂が馬場下町と交叉する角の地である。このあたりは今でこそ自動車の往来のはげしい埃の多い市街地になっているが、その頃はまだ江戸のはずれで、周囲に寺が多く、少しさきには早稲田村の田圃がひろがっていた。漱石は後年この生家を次のように回想している。

《私の旧宅は今私の住んでゐる所から、四五町奥の馬場下といふ町にあつた。町とは云ひ条、其実小さな宿場とし か思はれない位、小供の時の私には、寂れ切つて且淋しく見えた。もと〳〵馬場下とは高田の馬場の下にあるといふ意味なのだから、江戸絵図で見ても、朱引内か朱引外か分らない辺鄙な隅の方にあつたに違ないのである》（「硝子戸の中」十九）あるいは、

《当時私の家からまづ町らしい町へ出やうとするには、何うしても人家のない茶畠とか、竹藪とか又は長い田圃路とかを通り抜けなければならなかつた。買物らしい買物は大抵神楽坂迄出る例になつてゐたので、さうした必要に馴ら



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com